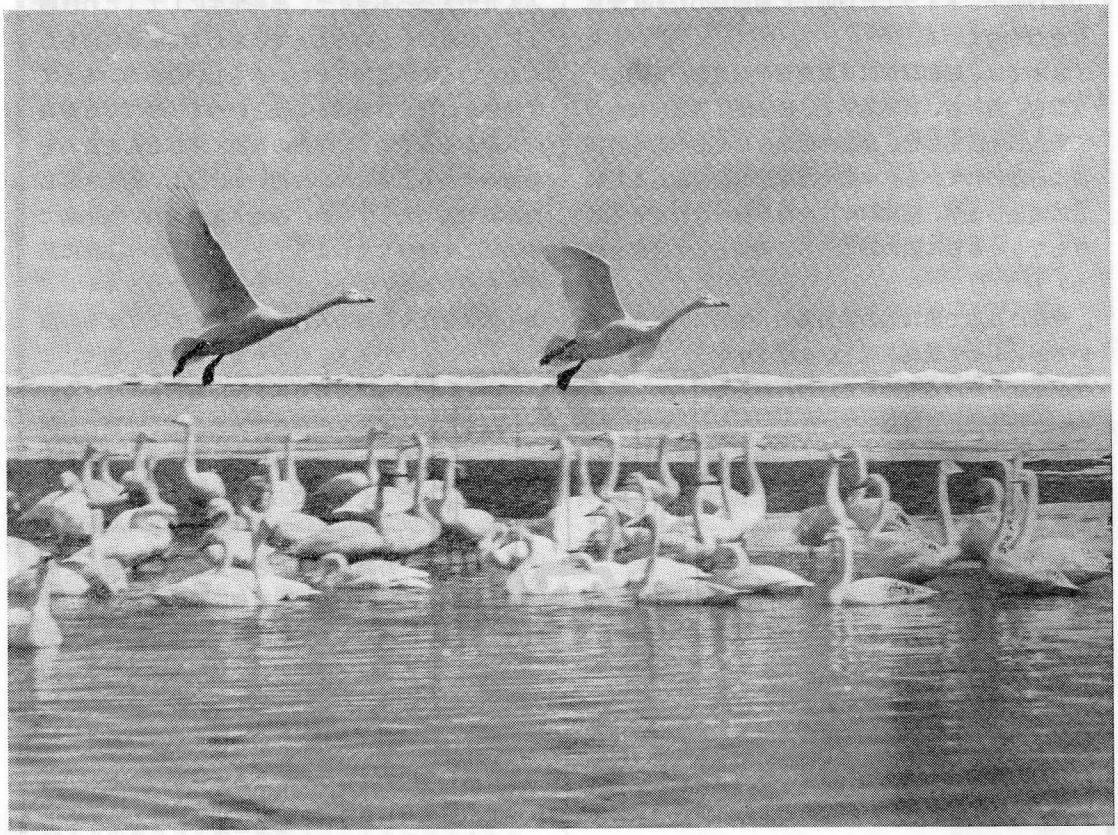
—北海道—

野鳥だより

第 2 号
編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和45年5月15日



シベリアへの長旅が近づく尾岱沼のオオハクチョウ　（根室市近藤映二氏撮影）

春のオオハクチョウ

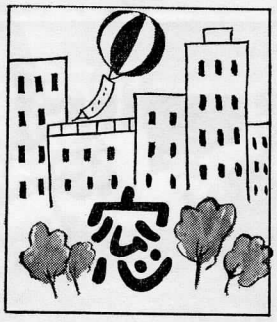
尾岱沼の水がぬるんで
アマ藻がゆらぎはじめると
帰巣本能が　はやがねのように
オオハクチョウの胸をかすめる
＜坊や旅じたくだよ……＞
遊びほほけた黒つ子たちは
真剣なまなざしで北の空を見る
それは遠く広い空の彼方だ
一群、また一群
先頭はお父さんが鳥が
そして　しんがりには母鳥が
黒つ子たちを包みこむように
勢いよく羽ばたいてゆく
さようなら——
白衣の冬の天使よ
さようなら——
人々は面をあげて
きらめく白い虹を追う
そこには緑の風がある
しあわせな人々の心がある——

バード・ウイーク

愛鳥日を設定して、一年のうちにその日だけは野鳥について考えてみようという運動を提唱したのは、ペンシルバニヤ州のオイル市の小学校長さんで、1894年のことである。これがオージユボン協会など鳥類保護団体の力によつて、アメリカ全土に広まり、学校教育の課程のなかに積極的にとり入れられた。ハンガリーでは1906年、ドイツでは1908年に植樹祭のなかに愛鳥日をつくつている。

日本では、昭和22年に日本鳥類保護連盟が提唱し、文部省、農林省、日本鳥学会、農業団体等と相はかつて愛鳥日を設定した。最初の愛鳥日はその年の4月10日に行なわれている。本道では季節の関係から5月20日に実施したが、昭和24年に全国が統一されて5月10日となり、さらに昭和25年からは週間として設定された。

今年は日本で第24回の愛鳥週間（愛鳥日）を迎えているが、かつて愛鳥週間といえば「小学生が巣箱をかける運動」と思われがちであつた初歩性から脱却して、全国民的な行事として質的に向上するような新らしい試みが必要といえよう。



この2・3年、本道では密猟ハンターの検挙や、鳥獣剝製業者の違反事件が相次いだ。こんな状態から一部には狩猟無用論さえささやかれている。たしかにハンターの体質には問題な面が多い。しかし、そのことと狩猟無用論を結びつけることはできない。鳥獣保護は人間の生活環境のうえでも、生物界の平衡のうえにも大へん重要なことであるが、鳥獣を保護することによつて、かならずしも有益な鳥獣のみが繁殖するとは限らず、人間に対して害性を持つものも多い。このコントロールのために狩猟は必要である。したがつて狩猟鳥獣の指定も前記の趣旨から繁殖力が強く、害性の多いものに限られている。密猟のあるなしは狩猟者自身の精神の問題である。本道は広大な未開発地帯が多く、猟場も獲物も豊富であつたことから一部の古い狩猟者には、略奪的な狩猟感覚が体臭のように泌みこんでいる。獲るという意識が先行して、護るという意識が非常に稀薄である。この密猟防止の具体的な進め方としては、当局の徹底した取締りの強化と、愛鳥家たちの狩猟者に対する厳しい監視の目と、狩猟者自身の自主規制の運動が実を結ぶかどうかにかかつている。

狩猟と密猟者

公園のコウライキジ

昨年の夏、札幌市内の交番からの電話で、コウライキジを保護したから引き取つてくれという。高いハイヤー代を払つて引きとつたが、持つてゆき場がなくて10日ばかりえさを与えて、元気になつたところで放鳥した。引きとつたキジは、羽根が抜かれて見るもムザンな姿であつた。聞くと中島公園に入つていたものをみんなでとつつかまえて、半死半生にして「これは勝手に獲れない」ということで、あわてて交番に持ちこんだというのが真相らしい。珍らしい動物がいるとすぐ追いかけ回す。保護をしたといつて持つてくる野鳥の大半がそうである。学校の教室に飛びこんだ野鳥を教師みずから上着をぬいで追いかけ回し、たたき落した小鳥であつたりする。「みなさん、きれいな小鳥ですね、よく観察しましよう」と、なぜ静かに生徒に話すことができないのか。ヒナを連れたコウライキジがおそれ氣もなく公園で人となじむことこそ私たちの願いである。バツキンガム宮殿の前で、ヒナ連れのカモに女王の乗物さえ止まる。イギリスの野鳥保護の徹底した話しを聞くと、精神年令12才論が切実に胸にせまつてくるのである。

野鳥を飼うことは先進国では殆んど解消されている。自然の野鳥を鳥かごの中に束ばくして、それで野鳥が幸わせであろうはずはない。「鳥類保護及狩猟ニ関スル法律」によつても、飼い鳥のための野鳥の捕獲は制限されて、特別の理由がなければ捕獲の許可はしない。ところが、ときどきデパートの小鳥部にさえ密猟らしき野鳥が売りに出される。

野鳥保護とは、野鳥には手をふれないという運動である。彼等にいこいの場と、繁殖の場を提供し、自然のままに親しむという趣旨である。ところが最近「死にそうなものを保護しました」「子供が捕えてきたので飼いたい」と、届け出るものが多い。届け出るのはよいが、届け方に問題があり、あたかも自分の占有物のごとく、届け出ることは、飼養を正当にするための魂胆なのである。それこそ泥棒にも三分の理である。保護という名の飼い鳥や、強行捕獲は保護ではない。保護なら保護らしく、健康になつたら放してやるべきだ。「放鳥すればかわいそうだ」などという保護は、保護とは似て非なるもので、野鳥保護思想を混乱させるものである。

保護収容

—その以て非なるもの—

アパートに住んでいても

衛藤　たみ子

アパート住いのベランダからは、窓々々と空ばかり。雀と野鳩がご常連。たまにカラスがとんでゆく。早朝、空をよぎる鳥の群に、たとえ双眼鏡が間にあつたとしても、僅かな空間でその姿をとらえることは困難である。

宮の森のO夫人が、けさは、アオーアオーとアオバトが鳴いた。ゆうべはトラツグミがヒヨーと鳴いた。ブツポウソウも一羽はたしかにいる。あ、いまウグイスが鳴いている、きこえますか？　と電話をくださることがある。集音機もない電話に聞えるわけがないと思うのに、ほら、今また鳴いた、と云つて私を羨ましがらせる。

円山、藻岩山、藤の沢とはそんなに遠くはないけれど真駒内のアパート群のど真中、小鳥の声は、夏の宵に網戸越しに、かすかに、キヨキヨキヨとヨタカを聞いた。真駒内自然公園のあたりからしい。それも、オリンピツクスケートリンクの工事が始められて以来あまり耳にしなくなつた。

暗い雪の日、公園傍の鈴なりのナナカマドに群れていた四・五十羽の小鳥は何だつたろう。キレンジャクでもなかつたようだ。小がらで細つそりしていたが、望遠レンズ付のカメラの持ち合せがなかつたのが残念だ。その一週間後、そこを通ると、実は一粒残らずなかつた。枯れた花柄が、小鳥は満足しましたよと、風花の舞う青い空にゆれていた。

自然公園の雪が消えて、丘の北斜面にカタクリやフクジユソウが蕾をもたげる頃、枯草をふんで行くと、こんもり盛り上つた所に皿状の巣の跡がある。ヒバリか、タヒバリか、ビンズイか。

斑入りのカタクリの二枚葉のひらかぬ群落のあたり、褐色の乾燥した小指の先位の糞がころころ転がつている野兎のものか、リスのものか姿は見えない。

タラのとげとげの木肌に、むしり取られたようなふわふわの毛の固りが付いていた。黄味がかつた白い毛は兎のだろうか。夏、その辺りは、リスが横切つたり、イチヤクソウが咲いていた。

7月半ば、イワガラミの緑白色の装飾花がゆらぎ、オオハンゴンソウが真黄色に咲く頃、カツコウはまだ鳴いていた。突然バタバタと目前の草むらに、雑木林の中から、ウヅラ大の鳥が威嚇するようにすばやくおりて来た。見とどけようとした時、行手に車が止まつていて、急に一人歩きが恐ろしくなり、あとをも見ずにその道をそれた。

文化の日、雪のくる前にと、あしりべつの滝に足を伸ばす。カラマツだけが、常緑樹の中でオレンジ色に煙つていた。葉の落ちた楓の梢にアカゲラが一羽、忙がしそう。滝壺の上の切り株に腰をおろすと、谷間の樹々に飛び交つていたカケス達が、恐れ氣もなく近づいて、一米位の傍までおりて来て、しきりにナラの枯れ葉の積つた中をかき分けている。ドングリを拾い出してはくわえて行く。

ノリウツギの枯れ花のある小路を行くと、ツピーツピーとカラ類が鳴いているので、警戒音の口まねをするとピピピピと鳴き乍ら小鳥たちの数がふえてくる。シジユウガラ、コガラの中に、ひときわ白く尾の長いのはエナガのようだ。小鳥たちの乱舞に思わずみとれる。

夫と滝の裏側まで来ると、大きな樹の幹の廻りを、ブルーグレーのミニスカートのゴジユウガラが、見えつ隠れつしてみあきない。

滝の音が絶えず心を洗つてくれるかえり道、ヤマガラの橙々色がオンコの葉かげに消えた。

いつも、時期を逸しては、又、その道順を知らないばかりに姿さえも見られないアオサギを、そつと見たいと今年こそはと二人で話し合つているのだが、例年のように、忙しさに紛れてチャンスに恵まれるかどうか。

繁殖期の彼等を驚かせたくない氣持の方が大きいのかも知れない。野幌は、テレビの自然のアルバムにおまかせしよう。

アパートに住んでいても、庭はなくても、自然がこわされぬ限り、こちらがその氣にさえなれば、いつでも野鳥たちは、楽園のよろこびを教えてくれる。

（真駒内曙団地・主婦）

☆原稿募集☆

野鳥だよりに皆さんの原稿を寄せて下さい。皆さんの身近かで発見した野鳥の記録や、感想文や愛護会に対する意見でも結構です。とくに写真を歓迎します。次回の発行は8月ですから、7月20日頃までに提出願います。

道庁林政課猟政係あてに。

私が救つた野鳥のこと

脇田　勝之進

✧アオジとマムシ✧

もうずいぶん昔のことになりますが、昭和5年6月末のある朝のことでした。自転車で厚沢部町に行く途中、泊村の人家のない山道で、自転車をおりて一服しましたが、そのとき私の正面のしげみの中でけたたましく鳴く2羽のアオジに氣がつきました。きつと近くに巣があり私が近くに立つているので、警戒しているのだろうと思つていましたが、だんだん私の近くに寄つて来ます。2羽のアオジは交替で私の手の届く所まで来て鳴いたり、しげみにもどつて鳴いたりするので、巣になにか変事が発生して、私に助けを求めているのでないかと悟りました。

さつそくアオジの導くままに、しげみに近づいてみると、ヨモギの茎を5本合せた地上1メートル位の高さのところに巣があり、その巣の上に大きなマムシがとぐろをまいており、ほんの少し羽毛のはえかけたヒナが2羽まさに呑まれようとしていました。

私は手早く手近な木の枝を折つてマムシを叩こうとしましたが、ヒナも一諸に乗つているので叩くことができません。やむを得ずマムシの目を木の枝で突いて怒らせ私に飛びかかろうと首を伸したところを狙つて頭を叩き巣から落しました。そのときマムシと一諸にヒナも地面に落ちましたが、幸わいけがもなく拾いあげて巣に入れてやつたところ、私がまだ巣のそばにいるのに親鳥は鳴きやめて巣に入り、クチバシでヒナをなでていました。この親鳥はヒナを助けてもらうため私を呼びに来たのでしよう。

✧チユウサギの看病✧

昭和43年5月初旬のことです。日本海にマス漁に出漁していた私の町の漁船に、疲労して飛べなくなつたチユウサギが1羽舞いおりて保護されました。支庁などと相談した結果、私が保護飼育することになりましたが、自力で立つこともできないほど衰弱しており、翌朝までには死ぬのではないかと思われるような状態でした。

その夜は徹夜で、手で口を開いて小ブナやドジョウを食わせるなど看護を続けたところ、翌日からは自分でなんとか餌を拾うようになりました、その後は日をおつて少しづつ回復し、7日目頃からは食欲も増し私が餌を見せると化粧羽根を拡げてついてくるようになりました。

元氣を回復したので放してやることにしたのですが飛んで行かず、このままでは野犬やタカに襲われてはと思つたので関係機関と協議して札幌の円山動物園に収容していただきました。

私は幸わいなことにこのふたつの事件を通じて、人間の愛情が大空を飛び廻る野鳥にも通じるのだと信ずるようになりました。この野鳥の信頼にこたえるためにも今後一層愛鳥活動に努めたいと思つています。

（江差町・鳥獣保護員）

わが国の自然保護対策を考える

小山　政弘

まだブームなどとはいえないが、この頃自然保護を望む声が強くなつている。

自然保護施策が進んでいる諸外国の様子を書物やテレビなどでかいま見るにつけても、自然を愛し、自然に親しむ心を持つわが国の民族性とはうらはらに、自然保護の施策が遅れている現状を嘆かざるをえない。

自然保護という、実は、人間社会と自然環境とを計画的、打算的に関係づける考え方の合理性を、国民の多くの人々が理解するようになるためには、わが国が百年あまりの間に急激に導入した多くの西欧文化の断片を体得すること以上に難かしいのかも知れない。

しかし、わが国に自然保護の思想がなかなか定着しないからといつて「どうも日本人は…」などと他人事のように嘆いたところで、前向きのエネルギーには決してなりえない。

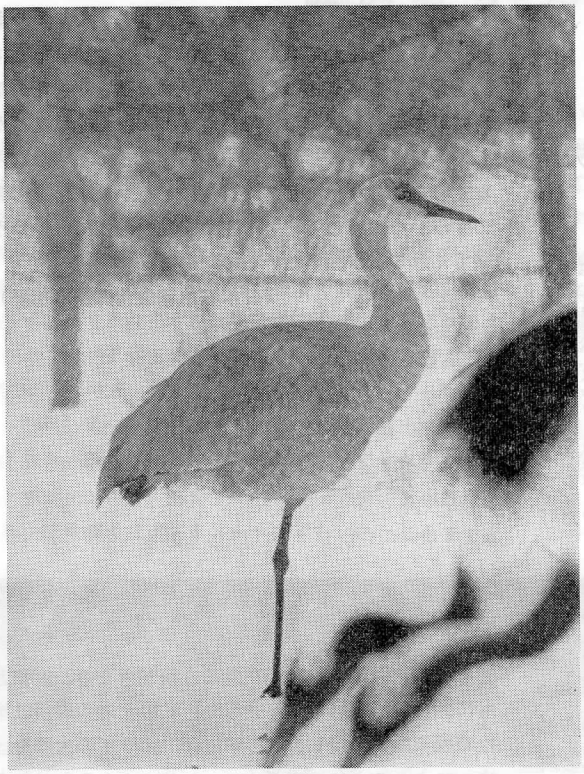
われわれの、自然を愛する民族性を大切にしながら、自然保護の促進を阻む者が何であるかをよく見きわめる必要がある。

公害の監視、観光事業による自然破壊のチエツクとともに重要なことは、国民に、正しい自然保護思想を**体験的**に理解させるチャンスを与えることだと思う。この「体験的」という点が大切で、単なる知識としての自然保護では困るのである。

自然保護推進団体の存在も重要だが自然保護関係の行政部門や自然保護の法令の確立、研究機関の設置を急ぎ自然保護を研究する学者や専問家も増えてほしい。しかし、それらの必要性を主張する民衆のエネルギーが、現在あまりにも足りないのではなかろうか。

そのためにも私たちの北海道野鳥愛護会は、会員全員が自然を保護する態度で野鳥に親しみ、研修しつつ、野鳥愛護を通して自然保護の大切なことを社会に広める貴重な団体として成長すべきものと思う。

（千才市・北栄分校教諭）



カナダヅル

文・写真　正　富　宏　之（専修大学美唄農工短大教授）

釧路の鶴居村で、ねぐらへ帰る前のタンチョウの群れの中に、灰色の小形のツルが1羽あわてて望遠鏡でのぞいてみたのが、写真のカナダヅルです。

学名は Grus canadensis（グルス・カナデンシス。カナダのツルの意）で名のとおり北米に多く住み、5亜種があるとされ、そのうちの基亜種 G. C. canadensis（ヒメカナダヅル）はシベリヤの東端でも繁殖し、渡りをします。こんどの個体もこの亜種で、昨年生れの幼鳥のため、羽色も成鳥と異なり淡褐色斑があり、頭部の赤みは最近少し認められるようになつたていどです。この種が今まで日本へ飛来した確かな記録は、1963年末の九州の例（成鳥）だけですが、19世紀にも場所などのはつきりしない採集例があります。この個体は4月10日現在、タンチョウの4羽の家族（親子各2羽）と一諸に行動しており、異種間の珍らしい関係を示しています。

鶴居村へは昨年10月ころ迷行してきたにもかかわらず、私が偶然に出合つた1月半ばすぎまで、アオサギだろうぐらいにしか思われていませんでした。このツルにかぎらず、貴重な自然の資料を埋もれさせないためにも、鳥への関心と確かな知識の普及が望まれるところです。

私の給餌台

加　藤　郁　夫

引つ越しをする近所の人からカナリヤとジユウシマツをもらつた。この小鳥達の餌の残りを捨てるとスズメが集まる。朝のひと時の憩いにもなるので、良く見えるように、給飼台らしきものを作つた。近所の人に「燈籠ですか、何か宗教のおまじないですか？」と聞かれた。5年ほど前のことである。

無精であるから、鳥の智識はそれ以来さつぱり進歩？しない。はつきり姿と名前を覚えたのは「アカゲラ」と「ヒヨドリ」で、あるらしいのである。「キジバトらしいな」「シジユウカラであるかな」と思つても確認のしようがない。図鑑の色彩とはほど遠いように感じられるし、私のカメラやスケツチの腕では、この野鳥達をキヤツチするにはあまりにも敏捷すぎる。用心深くて利口そうな動作が、一秒でも長く私の視界にあることを願いながら、「アレヨ、アレヨ」と眺めるばかりである。

このような無精さではあるが、野鳥の魅力は私を離さない。昨年新しい市庁舎が建設され、大きな前庭（実は児童公園だが）ができたから、上司に無断で給飼台を建てた。スズメもこないさと友人は笑つたが、奮発して牛の脂身を吊したところ、数日後の朝「アカゲラ」が来た。これにつられたのか高い梢にも小さな野鳥の声も聞かれるようになつた。給飼台に好意的だつた友人5名とともにこのたび本会に入会させていただいたが、かくのとおり、たあいのない会員である。

本市内のほぼ中央に位置する街路の舗装1200メートルが今年完成するが、街路樹の樹種を野鳥のために「ナナカマド」に決定した。直経35ミリの苗木を植えるから、明年は135本が赤い実をつけるであろう。小鳥の集まる姿をいまから楽しみにしている。

（芦別市役所都市計画係）

カツコウ

平　林　道　夫

◇野鳥は森林を守る◇

大都会の市街地でカツコウの鳴き声を聞くことができるのは、札幌以外にはそうざらにはなさそうである。札幌の市街地といつても中心付近では植物園や知事公館、北大周辺ぐらいのようだが、カツコウもホトトギスと同じように自分で巣をつくらないで、モズやホオジロなどの巣に卵を産みつけて、他人にヒナを育ててもらうあつかましい鳥である。しかしこれに似て他人のフンドシで相撲をとるといつた人も多いようなので、カツコウだけを悪くいうわけにもいかないだろう。

さてそのカツコウであるが、なにしろ他人様の巣に産卵をする都合上、仮親の巣が沢山あるところでなければ飛んで来ても意味がない。最近北海道の林業関係者が調査したところによると、植林をした林地と自然林の中における野鳥の巣の数は3対7か2対8で、自然林の方が断然多いことがわかつた。これは自然林の方が野鳥の餌になる虫の種類が多く、また植林地は下草刈りなどで小鳥のかくれ場所が少ないといつたことが原因になつているらしい。このように植林地に小鳥の数が少なくなつたために、植林地が大面積に及ぶと逆に害虫が増加する結果となつて、近年植林をした林木の虫害が急増しているそうである。せつかく植林をしてもこれが害虫によつて荒されてしまつてはなんにもならない。

同じような問題がお隣りの中共でもあつたようだ。終戦後一時流行した三悪追放の一つに、「ハエ、ネズミ、スズメの撲滅運動」が提唱され、盛んな撲滅作戦が展開された。その作戦はたちまち成果があり、当時中共を訪問した人々の言葉によると、ハエをほとんどみかけなくなつたと伝えられ、ネズミ、スズメも撲滅に近いところまで進んだのかもしれない。ところがその後数年にしてスズメだけは三悪から除かれたということである。スズメは穀物を食いあらすということで撲滅の対象に入れられたのだが、撲滅作戦でスズメが少なくなつたとたんに公園や山の樹木が虫の害で次々に枯れはじめ、スズメの益鳥としての働らきがクローズアップされたというわけで、世の中は全く「持ちつ持たれつ」である。

◇いつまでもカツコウの声を◇

去年の5月の北海道は氣温が低く寒かつたせいか、カツコウの鳴き声を初めて聞いた日が例年より少し遅かつた。そればかりか数も少なかつたようであつた。

札幌も宅地造成が進んで次第に野鳥のすみかが少なくなつているのであろう。そのうえ山地の植林によつても野鳥が閉め出されるということになると、カツコウも北海道へは余り渡つて来なくなるかもしれない。他人にヒナを育ててもらうあつかましい鳥ではあるが、その鳴き声はいかにも哀調を含んでおり、時には途中で吃つたりして滑稽でもある。朝霧の中から聞える鳴き声はなんとなく心をなごやかにしてくれる。どうか札幌付近の野鳥のすみかを保護して、いつまでも札幌の街にカツコウが来てくれるよう願いたいものである。

（日本氣象協会北海道本部長）

私とアオサギ

西　川　半次郎

私は昭和21年3月に現在地に入植がきまり、家族とともに開拓の鍬を打ちこみました。私の土地の周囲は雄大な野幌原始林に接し、この中にはアオサギの大群をはじめ、コウライキジ、ウグイス、シジユウカラなど数多くの野鳥が生息しており、これら野鳥のさえづる声もさまざまで、毎日の仕事を野鳥にはげまされ今日まで過したようなものです。

とくにアオサギは、雪の消えない3月の彼岸頃には先発隊が渡つて来て、4月中旬にはいたんだ巣の修理や新らしい巣作りをはじめ、5月には産卵、6月にはかわいらしいヒナがかえります。アオサギのヒナがかえる頃には、北海道も初夏を迎えます。

このアオサギは、古い人々の話しによると、むかしは空知郡長沼町の千才川沿いに渡つてきていたが、それが分離して野幌原始林内東七号線入口の南側にうつり、どんどん数を増していたが、昭和20年にこの森林が伐採され、この春渡つて来たアオサギの大群は落ち着き場所を求めてしばらく迷つた後、約1キロ離れた現在地の広島町字西の里光原部落にうつり住むようになつたということです。このアオサギも、最近ではどんどん数が減つているようです。

私は今後部落の人たちとともに、この森林を守り多くの愛鳥家や自然を求める人々のために、野鳥の天国を残したいと念願しているものです。

また、この森林にはキツネ、シマリス、タヌキ、ウサギなどもいます。北海道でも唯一のめぐまれた環境を保つており、この大自然を守りぬく決意こそ、この地域に住む私たちの任務であると考えております。

（広島町西の里在住）

庭のコウライキジ

沖田兵蔵

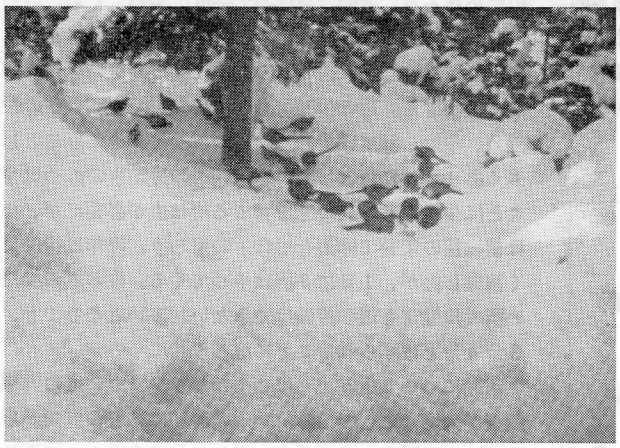
自然のふところにいだかれた日々のくらしの中で、私の自然保護への執着はますます高まるばかりですが、このたびの野鳥愛護会の発会に心からの喜びを感じます。

私とコウライキジの出合いは20年も前のことです。面積約 3,000平方メートルの私宅の庭園には、庭木が茂っているためか、珍らしい野鳥が数多く集まり、老いの身をなぐさめてくれますが、晩秋の頃のある日、オスのコウライキジが1羽、美しい姿を見せたのです。喜んで妻が窓先から30メートルぐらい離れたところへ、トウモロコシを吊してやつたところ、毎日足しげく通つてくるようになり、私とコウライキジの対話がはじまりました。

トウモロコシを、毎日1メートルづつ窓に近づけたところ、12月頃には窓下1メートルぐらいのところまで近づいて餌をついばむようになりました。そのうちメスも1羽加わり、2羽で通つてくるようになりました。こうして4月頃まで餌づけを続けましたが、やがて雪が融けますと、繁植のため山へ帰つたのか、姿を消してしまいました。ところがその年の初雪の降る頃、また姿を現わしたのです。

旧知の人にあうような、胸のふるえる喜びでした。そして冬になると、毎年私の家ではコウライキジの交歓が続いてきたのです。

4年ほど前からは、その数もどんどんふえて、10～15～20～25羽と大世帯になりました。私たち老人2人の生活、しかも雪国の長いつれづれに、餌づけは楽しい日課の一つになりました。



餌づけの場所は窓から10メートルぐらいの樹令50年のシノブヒバのそばにきめており、トウモロコシを粒にして、毎年11月から翌年の3月まで、100～120kgほどやつています。最近トウモロコシの入手が困難で、農協や農家に頼みこむなど苦労も尽きません。

聞くところによりますと、今年から狩猟解禁になるとのことで、キジの可愛い姿を見るのも最後かと思い、この1月から毎日記録写真をとつています。この写真はその中の1枚で、窓のガラス越しに、逆光でとつたもので良くありませんが、コウライキジが喜んで餌をついばんでいる姿を見てほしいと思います。

（元栗沢町長）

道南のオジロワシとオオワシ

佐藤昌蔵

道東、根室地方のオオワシ、オジロワシは最近天然記念物に指定されるなど有名となつているが、松前町を中心にした道南の各地にもこれらのワシの記録が多く、かつては全道各地に飛来していたものであろう。

松前町の沖合はるかに浮ぶ離島小島を昭和5年頃、函館市末広町で毛皮商を営んでいた小川長之助という人が道庁から10年契約で借地して、ナンキンウサギを放獣したことがあるが、5・6年後には小島全体が白色化するほど繁植した。このウサギをねらつて満洲方面から、オオワシ・オジロワシが飛来するようになり、当時このワシを松前町館浜の海岸でもたびたび見受けることができた。相当の数であつたと思う。

その後、小島の借入期限がきれ、今はウサギの姿もなくなつたが、その後同じく離島の大島に多数のウサギが繁植し、オオワシも大島に移つたようだ。そのほか福島町岩部海岸の道路上の岩山でも、たびたびワシの勇姿を見受けることができた。

また本年の2月には松前矢越道立自然公園内の矢越海岸で、海上の餌をとりそこね海中に落ちたオジロワシが助けられたことがある。

このようにオオワシ・オジロワシは、かつては道南の空にもその勇姿を現わしていたものであるが、最近では殆んどその姿を見かけなくなり、急激にその数を減じているものと思う。

聞くところによると、この2、3年で、これらワシの密猟品が多く剝製業者の商品として発見されていると聞くが、まばろしの鳥とならない為にも、強い保護対策を望むものである。

（知内温泉主）

ウソによる桜の被害と駆除

隅田重義

道南には桜の名所が多い。中でも松前の桜の長い歴史を語る多種多様の花の姿は、今や松前にとつても観光客にとつても、重要な観光資源となつている。いつぽう函館公園の夜桜は、函館の夜景とともにまことに情緒深いものがある。そのほか赤川、森、五稜郭、清水陣屋などの、郊外の桜を訪ずれる人も最近は多い。これまで花の少ない年は「去年一度に精を出し過ぎて咲いたため」ぐらいに思つていたが、3年ほど前に、名所のサクラの被害が問題になり、「ウソによる桜の被害の実態」がNHKのテレビ放送となり、渡島支庁、函館市の担当者と私の3人で、それぞれの立場から、感想、所見、研究の結果を発表したことがある。

今年は例年になく渡島の連山も、函館も吹雪と寒さの中におおわれてるのに、ウソの群は津軽の海を越えて道南方面へ姿を現わした。雪深いこんな時になぜ北国へやつてくるのかとウソにきいてみたいが、ウソの口からきくすべはない。これも人間が解明しなければならない自然のナゾであろう。昨年の実態を記録にして待機していたので、私たちは農林大臣の許可をうけて2月15日から駆除をはじめたが、今年は昨年に比べてウソの数は少なかつた。多い時で50羽位、少ない時は5・6羽であつたので、15日間で終り、今年はもう姿を消してしまつた。サクラの花が一度にパツト咲いて散るように、一度に来てパツと去つてしまつたので全くウソのようである。

先日は吹雪の中で調査したが、ウソの群はフイフイとなきながら枝から枝へとつつき廻つていた。やはり早朝に一番多くやつてくる。この雪と寒さに戦う野鳥は空腹のためだろう。夜明けを待つて一度にやつてくる。一斉に高い枝にとまるがしばらくは動かない。1羽が動き出すとその速いこと、白い雪の上にサクラの芽のコボレが黒く散乱する。芽は少しも食べていない。胃袋は芽の栄養分、みつ、汁だけである。このみつはナメてみるとしぶくあまくねばねばしている°一つの芽からのみつはまことに少量である。ヒナを育てる時は虫が必要だが、今は植物性の栄養で体力をつけるのだろう。今年は特によく観察したが、1日に3回はやつてくる。桜の木の少ない所では被害も過少評価はできない。多いところでも、3分4分とけずられることになろう。

駆除について思うことは、やはりウソについての実態調査が大切なことである。いつの時期に、どの方向からどのような群来をするのか。こうした調査によつて有効適切な方法で必要最少限度の駆除を行うことである。ウソが少数な時は、追い払うだけでよいだろうし、数が多すぎる時はその実態に応じた適切な処理が必要である。益鳥といい害鳥というのは人間の側からみた定義づけで鳥の側からみると生存権を主張しているにすぎない。

私たちは多くの花を咲かせ、その花の下で野鳥の声もききたい。自然界のバランスを破壊してはならないと思う。

（函館市・鳥獣保護員）

四季の鳥

宮田泰
（札幌市平岸）

○春の夕スキーリフトで降りくればやぶうぐいすの声は幼なし
○ひくき雪断崖の上に流るひるつかた行々子啼けり春逝かむとす
○うららなる雪のとける日陽だまりの泥水に雀の群れが水浴ぶ
○生い長けし草原の茅に夕陽照り競いて鳴くか行々子と蛙
○道細きぶな林につづきいて間近かにきこゆほととぎすの声
○樹林帯ぬければそよぐ朝風にとおくすがしき郭公の声
○とどまつの樹海をこえてとび一羽陽はさかりゆく奥えぞの午后
○尾瀬沼に雨燕ひくく飛び交いて雨のあかるむ夕べとなりぬ
○晩秋の陽は傾きぬ北の海辺ゆりかもめ群れり数も少なく
○風白き野末の限り羽根白くひるがえしゆくはなんの鳥ぞも
○シベリアへ渡らむ翼休めつつおおはくちようの群れるはかなし
○庭雀群れ集う給餌台元日の朝は餌おおくやる

☆探鳥会のお知らせ☆

次のとおり第2回の探鳥会を開催しますので、多数の方々のご参加を期待しています。

第1回は5月10日、野幌森林公園に小鳥バスを運行しましたが、3コースに別れて楽しい一日でした。

日　時　6月7日（日曜日）午前7時30分
場　所　藻岩鳥獣保護区
参集場所　藻岩山登山口（伏見町慈啓病院前）

鳥だより

根室の野鳥

岡　清　松

道内各地の愛鳥家が、身近かな話題をどんどん発表して下さることを御願いするために、まず根室の「野鳥だより」を御届けします。

根室地方は今年、今までにない豪雪に見舞われたので野鳥の生活も苦しかつたようで、今までみられなかつた現象が現われています。

✧オジロワシ・オオワシ✧

根室地方のオジロワシ・オオワシは有名ですが今年はとくに渡りが多く、ノサツプ岬付近の海上であまり大きくない氷塊にオジロワシが10羽も止まり獲物をねらつている姿を発見しましたがとても壮観でした。そのうえすぐ近くの氷の上にはオオワシが3羽、100羽 を越すコオリガモの群をねらつて待機していました。例年2～3羽のワシを見かけることはありますが、こんに多いことは珍らしいことでした。

✧タンチヨウ✧

根室市の水道沼で去年の12月末にタンチヨウの生息を確認し、1月中旬頃はトサポロ沼付近の林で生活しているのを観察しましたが、その後は豪雪のためスキーを使つても自由に活動できず、調査は思いどおりできませんでしたが、3月に入つて、根室駅付近の草地や海岸の草地で発見されています。例年ならボツボツ産卵するころですが、今年は雪が多いので一週間以上はおくれるようです。

✧オオハクチヨウ✧

根室のハクチヨウはまづ風蓮湖に渡来しますが、湖が凍結する12月末にはオダイトウや春別川の川口付近に集まります。ハクチヨウ見物は2月か3月が適期です。

数千羽の大群が集まるため餌がたりなくなり、3月下旬になると、ほとんどのハクチヨウが栄養失調になります。へい死するハクチヨウはこの時期に多くみられます。

例年3月末になると風蓮湖の氷がとけますが、今年は4月13日に隣りの温根沼が半分あいた程度で栄養失調の鳥が多くみられました。例年4月25日頃にはシベリヤに飛び立ちますが、この状態では十分に体力を回復することができるか心配です。

例年体力の回復がおくれたハクチヨウが何羽か風蓮湖に残りますが、今年も何羽かは残るものと思われます。

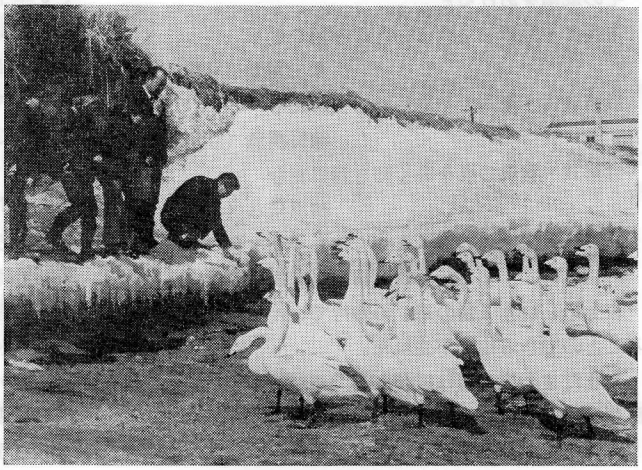
✧カモ類✧

オナガガモの多いことに驚きます。風蓮湖をめがけて来ますが、氷があるので、温根沼に集まります。湖面は勿論、道路脇の草地に折重なるように降りています。毎日次々と北方に旅立ちますが、何万羽いるものか数えきれません。自動車が通つても平氣ですが、車からおりて近づこうとすると一斉に飛び上ります。

✧小鳥たち✧

2月2日レンジヤクを見ました。3月2日にはハヤブサがツグミを追いかけ窓を破つて人家に飛びこみ両方とも傷つき、保護しましたがツグミはその夜、ハヤブサは翌朝死にました。キレンジヤツク・ツグミ共に当地としては早い渡りです。

（根室市・鳥獣保護員）



（写真は風蓮湖の白鳥・筆者撮影）

本会の会員を募ります

北海道野鳥愛護会は、自然を愛し、野鳥保護に理解を有する人々の会で、どなたでも加入できます。野鳥の好きな方、野鳥を研究したい方、野鳥を通じて友を求めたい方はどしどし加入して下さい。

1．会員の資格は、年令、性別を問いません。

2．会費は年額1人300円。団体は1000円です。加入希望者は会費を添え、住所、氏名、職業を明記のうえ申込んで下さい。

3．加入申込みは、道庁林務部林政課内「北海道野鳥愛護会連絡事務局」に提出して下さい。会員には会報（本号形式のもの）を年4回、その他野鳥通信を配布し、会員の親睦と研究活動を進めるほか、探鳥会、野鳥研究会、野鳥懇談会等に参加していただきます。

鷺の森吟行

工藤紫蘇

明治百年の記念事業として「明治の森」が、「自然の再建」の中心課題として各地でとりあげられたのはまことに喜こばしいことである。江別市民憲章に、

空も緑も美しいのびのびとしたまちをつくりましょうと、自然美の建設を第一に掲げているのは、最近札幌市の膨張の影響で都市化が進み、緑地の減少することえの警告もさることながら、世界にもまれといわれる平地の原始林（野幌自然林）を持つ誇りをシンボルとして、永久に心の支えとしたい願望のあらわれなのである。

こうしたいきさつから、去る昭和43年5月に江別俳句教室が音頭をとり、江別開基90周年記念俳句大会を開催した。大会の氣運を盛り立てるため、野幌原始林に毎年飛来するアオサギの吟行をあわせ行なうことにし、さらに江別市民以外にも連絡したところ、旭川、美瑛、小樽千歳、札幌などからも参加者があり65名に及んだ。

その成績をあげると

市長賞・原野いま大きいとなみ鷺こもる
米山露女（札幌）

教育長賞・鷺飛ぶや影春林の笹わたる
池野溪魚（江別）

青鷺賞・青鷺の巣を高く抱き森目覚む
藤田素月（小樽）

最優秀作品・鷺の森ふえつを知らずひな育つ
伊藤雪女（旭川故凍魚夫人）

以上のとおり「鷺の森」の吟行で、はじめてものにすることのできる佳品が生れた。

たまたま小生の句は振わなかつたが捨てきれず、一部添削を加えて。

青鷺の腹ひらひらと辛夷の秀　柴蘇

として、長岡萩邨句碑記念俳句大会に出句させていただいたところ、争川源義先生（河主宰）の天をいただき面目をほどこし、この句を生ましてくれた「鷺の森」にあらためて心から感謝した次第である。

日本野鳥の会の中西悟堂先生は、自然美の失われつつあることを相当以前から訴え続けられているが、先生の野鳥探行には水原秋桜子先生も同行され、水原先生は野鳥俳句を提唱されその著書も数多い。

水原先生の名がでたので、先生の句と、先生の選んだ鳥の句を著書「魚鳥俳句」の中から抜すいしてみると、

燕飛ぶ風やオリーブの雨こぼれ　秋桜子
鳴く雲雀林檎の花影畑に満つ　秋桜子
鶯や炭焼くけむり空ふかく　秋晴
揚雲雀ゆきかふ貨車と海光る　牛歩
初燕牧馬の郷は狭けれど　はまゆう
初燕港の朝の賑ひに　山彦
燕とぶ小さき町の飾窓　緑鬼

ついでに、本道俳壇に新鮮な情熱を燃やしている北光星氏の句碑が、母校北竜校の校庭に建立されたが、碑句が、

父の年輪もつ伐り株に鷹かえる　光星

であり、本道開拓の歴史からみても、野鳥の存在は忘れてならない魂のよりどであることに思いあたる。

（江別市・俳誌葦牙同人）

野鳥愛護教育

高橋淳根

昭和41年、私は当時別海村上風蓮小中学校で、小学校1年から中学校3年まで全学年の理科を担当していた。野外で小学校1・2年生に、シジユウガラの群が木から木へと渡るようすをじつくり観察させ、児童の反応を調査し感想を聞いたところ、ほとんどの児童が一斉に「かわいいね」といつてすなおに観声をあげた。おなじ場所で3年生に観察させたところ1・2年生の感想より発達し、「飼つてみたい、先生この鳥の餌は？」と私をとまどいさせた。私も小学校のころ、よく物置小屋に迷つて来たスズメを捕えてはボール箱に空氣穴をあけ、米、水を入れて飼つた経験がある。そのまま餌づけがうまくいくといいが、スズメのように頑固な鳥は、簡単には人間の給餌する餌を食べない。そしてついには死に到らしめるのである。その死骸みた瞬間の児童の心理的な動揺を教師は考慮しなければならない。こうした動物愛護の氣持は家庭内の両親の教育においても同じことである。教室の中へたまに、スズメが入つてくることがある。児童が追いかけ回す学級。そつとガラス窓をあけて逃がしてやる学級。前者は野鳥愛護の指導がなされていない学級であろう。

この時の指導としては、「かわいそうだね」と軟らかい言葉で、鳥や、草、木、虫のひとつひとつにも尊い生命のあることを話してやるべきであろう。この小さな心づかいが情操教育を発展させる糸口になるのである。教室で草花を切る時にもおなじように「ちよつとかわそうだけど」と教師が自然に口から出るようにしたいものである。この問題をＰＴＡの会合、学級懇談会で話合い、また学校においては学校経営の中に積極的に取り入れ全職員、全生徒、全家庭が一体となつて展開してゆくことが望ましいと思う。

（根室市・光洋中学校教諭）

旅と野鳥と

―階楽園の水鳥―

野村梧郎

▷高尾山探鳥記◁

4月のある日、八王子の農林研修所を出発した私たちは高尾山へ探鳥会に出かけました。講師に日本鳥類保護連盟の高野、柳沢両氏を迎え2班にわかれて高尾山に登りましたが、この日私の班が見聞した鳥は、シジユウカラ、キセキレイ、アオジ、ホオジロ、カケス、アオゲラエナガ、コサメビタキ、ウグイス、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、サシバ、メジロなど17種でした。高尾山の緑は良く保存されていますが、その緑を求めて東京都民がおしかけます。訪ずれる人が多くなればなるほど有形無形の圧迫をうけて、この山に住む野鳥の数が少くなるとのことで、去年の探鳥会では同じルートを通つて25種を記録したとのことです。去年と今年のこの数字を比較しただけで、直ちに鳥の数が減つたと言えないにしても、好ましくない傾向を示しているということはできましよう。

▷オオルリのこと◁

保護連盟の高野先生の話を伺いますと、最近オオルリが見えなくなつたとのことでした。オオルリは巣造りの場所をきめますと、テリトリーを確保するため、オスが良く目立つ木の梢などに止まり囀ります。声が良く、小鳥の仲間では体が大きなほうなので、ツートンカラーの体色とともに非常に広く目立ちます。そのため都市近郊のオオルリが密猟者に狙われます。オオルリは巣造りの場所を確保するため仲間うちで争そい、強いものから順々に良い場所を確保します。ですからいつでも条件の良い場所にオオルリがいるため、密猟があつてもオオルリの数が減つたように見えません。つまり最後の1羽まで獲りつくされ、氣がついたときにはオオルリは密猟者の手によつて完全に消えていたとのことでした。この話で私は「1羽や2羽は良いじやないか」とか、「とつてもとつても減らない」といつた言葉のかげで進む自然の崩壊の恐ろしさをあらためて思い知らされました。

北海道ではまだオオルリを見ることは珍らしくありません。しかし姿と声の美しいこの鳥を、籠に飼うため密猟者が狙い続けています。注意しないと高尾山の例のように北海道でもこの鳥が〝マボロシ〟の鳥になつてしまうかもしれません。この話を聞いて私たちの野鳥愛護運動というのは野鳥を可愛がるといつたいわば消極的な立場から1歩進んで、積極的に密猟を規制する強い態度を示す必要があるのではないかと思いました。

▷階楽園のこと◁

午後おそい汽車で上野をたちました。夕暮近く水戸を通過するとき、列車の左手に日本三公園のひとつ階楽園の丘が迫り左手に池が見えました。幸わいなことに列車が信号のため臨時停車したので池の模様をゆつくり見ることができました。数年前の冬、汽車の窓からこの池に集まるカモの群を見たことがありましたが、今回は4月の下旬のことであり、カモの群は殆んど渡り終つたあとで数が少なく、カイツブリ、バン各1羽、カルガモ2羽それに10羽たらずのマガモだけしか見えませんでした。汽車の窓からカモのいるところまでほど近く、そのうえ池をわたる堤防のような形で道路もついています。だが水鳥たちは汽車や人間の動きなどを全く警戒する様子はなく、ノンビリと春のたそがれを楽しんでいました。

日本人の心は野鳥を愛し親しみ、自然を守ることができないほど荒廃しているわけではありません。そのきつかけがつかめないだけのことです。本道でもタンチヨウやハクチヨウの保護にみられるような大きな成果を収めた例があります。しかし、タンチヨウやハクチヨウのような特殊な野鳥だから保護するというのではなく、日常生活のなかに自然の友として野鳥をとけこましてゆくべきでしよう。階楽園で見られるような風景を日本中どこでもみられる風景にしたいものです。　（道林政課）

北海道の鳥

日ソ渡り調査鳥

ソ連中央自然保護研究所から、日本鳥類保護連盟を通じて依頼のあつたガン、カモ、ハクチヨウの一斉調査が、1月17日全国一斉に行なわれました。

ガン・カモのような渡り鳥は年ごとに減少しておりとくにガンが目立つて減つており、戦前に比べると10数分の1といわれます。この調査では全国で 5,542羽が確認されましたが、昭和38年の調査の 9,264羽をさらに下回つていました。これらのことから、ガンの狩猟を禁止する声が高まつています。またハクチヨウは11,637羽が確認されました。

本道では14支庁で、鳥獣保護員や猟友会の人々528人の協力によつて実施されましたが、ガン類ではマガン12羽、ヒシクイ6羽が確認されました。（幾春別川天塩川、十勝川水系など）このほかコクガン、カリガネなども渡つて来ますが発見されませんでした。

ハクチヨウでは、オオハクチヨウ 6,637羽が確認されました。12月頃には風蓮湖だけでも1万羽以上が確認されており、厳冬期を避けて本州方面へ分散したものでしよう。支笏湖や長沼など、全道的に飛来しているようです。

カモ類は38,262羽が確認されましたが、これは調査地面積が陸上の一部に限られているためで、海上その他を含めますと、相当量にのぼるものと思われます。カモ類の種類としては、マガモ9,030羽、カルガモ780羽コガモ2,662羽、コオリガモ8,325羽、クロガモ5,459羽等となつています。

エゾアカゲラ（野村梧郎撮影）

愛護会の創立総会
―会長に犬飼さん―

北海道野鳥愛護会の創立にむけて、4月10日午後1時から道庁会議室で創立準備会が開かれ、総会対策が協議された。その結果、創立総会は5月9日、午後1時30分から札幌市労農会館に、約70名の会員が参加して開かれた。

設立発起人代表の犬飼北大名誉教授の開会挨拶に次いで、来賓祝辞、事務局からの経過報告のあつたのち、議事に移り、各種事業計画を決定し、次のように役員を選出した。

会　長　犬　飼　哲　夫（北大名誉教授）
副会長　宮　脇　恒（道国土緑化推進委員会理事長）
　　井　上　元　則（栄養短期大学教授）
　　斉　藤　春　雄（道文化財専門委員）
　　土　屋　文　男（医師・日本鳥学会会員）
監　事　苣　野　寿衛吉（北電監査役）
　　佐々木　　勇（野鳥の会小樽支部長）

なお、愛護会の推進役として幹事会が置かれ、幹事には設立発起人となつた人々が推せんされた。

幹　事　川　村　　順（道緑化事務局長）
　　百　武　　充（日本野鳥の会）
　　藤　巻　裕　蔵（道林業試験場）
　　柳　沢　信　雄（豊平小学校教諭）
　　金　田　寿　夫（円山動物園飼育係長）
　　野　村　梧　郎（日本野鳥の会）
　　中　田　克　道（札幌市・鳥獣保護員）
　　安　田　鎮　雄（道林政課猟政係長）
　　清　水　保　雄（道林政課）
　　萩　　千　賀（道林政課）
参　与　三　宅　正　幸（円山小学校教諭）
　　小　沢　広　記（藤の沢・鳥獣保護員）
　　梅　木　賢　俊（日本鳥学会会員）
　　羽　田　恭　子（主婦・円山在住）
　　平　井　さち子（主婦・円山在住）
　　谷　口　一　芳（後志支庁林務課長）
　　渡　辺　銀次郎（札幌営林局庶務係長）

◇行事日誌◇

◇ 昭和44年11月17日　午後1時半から道庁7階会議室で北海道野鳥愛護会（仮称）の設立発起人会が開かれ発起人代表に犬飼哲夫氏を選びました。

◇ 昭和45年2月10日付で、準備会としての会報「北海道野鳥だより」第1号を発行しました。

◇ 同年4月10日　午後1時半から道庁11階会議室で創立準備会を開催し、規約、事業計画、予算案などを審議しました。

◇ 5月9日　午後1時30分から労農会館大会議室で創立総会を開催しました。当日の会場で野鳥保護功労者に対する表彰式が行なわれ、林野庁長官1、北海道知事5人の表彰が行なわれました。

≪事務局だより≫

5月9日の創立総会から、野鳥愛護丸は広い海原をひた走る快調なスタートをきりました。自然と人間の幸を求めての船出です。荒い波風も皆さんのがつちりしたスクラムで乗り切つてゆくことでしよう。

遠くは神戸、京都、東京と、全国からの会員が参加して野鳥保護への認職の高まりをひしひしと身に感じます会の質的運動を高めて、皆さんの満足を得たいと心がけております。

今回はぶしつですが、会員番号によつて無差別に送稿を依頼しましたが、全く驚く程の原稿が集まりました。寄稿者の巾の広がりは、本会活動の広がりにも通ずるものと喜んでおります。皆さんの健康を祈ります。